

## 小説同人誌評 43

# 生い立ちを 描くことの魅力

細見和之

本来は年四回で、季節ごとに記していたこの小説同人誌評だが、今回は秋を飛び越して冬にいたってしまった。というか、夏に書くはずの前回の分がすでに秋にずれ込んでいたのである。さて、今回も三〇冊あまりの雑誌のなかに何篇もの力作を読むことができた。どこまで紹介できるだろうか。

まずは『あべの文学』第38号。

同誌掲載の、高塚基「英子の憂うつ——羽ばたけオトメ——」は、通名「木下英子」を名乗っていた女生徒が高校に入学してから、夏休みのサマーキャンプをへて、本名「李英子（イ・ヨンジャ）」を名乗って生きてゆくことを決意するまでを描いた、四〇〇字詰め換算で二七枚あまりの作品（以下「四〇〇字詰め換算」は略する）。

時代は一九六九年、まだまだ日本で日問題が一般には意識されていない時代。英子は自分が朝鮮人であることへの違和感を強く抱

えて高校に入学する。その高校で、英子は「朝鮮奨学金」に応募するよう担任から勧められる。「朝鮮」と名の付くものから離れたいと思っていた英子は最初乗り気ではなかったのだが、家庭の事情なども考えて応募する。その奨学金の受給者は夏休み期間中のサマーキャンプに参加でき、そのサマーキャンプで英子は朝鮮語を初めて学ぶとともに、自分と同じ立場の在日朝鮮人と出会い、朝鮮人としての自覚を高めてゆくのだった。

あらすじだけを紹介すると、在日朝鮮人の成長を描いた典型的な物語ということになるが、登場する人物がとても印象的なのだ。英子自身がそうだが、朝鮮奨学金の説明をする洪正夫（ホン・ジョンブ）、サマーキャンプで英子と同室になる高美麗（コウ・ミリヨ）、同じくサマーキャンプ参加者で自殺未遂まで企てる韓文哲（ハン・ムンチョル）など、いずれも彫り深く描かれている。

個人的な話になってしまいが、時代はすこし下がるとはいえ、私の地元でやはり在日朝鮮人の同級生たちが受けていた夏期学校のイメージなどを膨らませるうえでも、この作品は私にとって貴重だ。

同誌掲載の、浅井歌音「スカレットのこ」とくは、広島市に住む高校二年生の生徒が、祖母の姉の残した手記を紹介するという体裁の、三四枚あまりの短篇。広島での被爆体験

をいまだどう描くかという問題に、正面から向き合った作品である。

タイトルにある「スカレット」はマールレット・ミツチエル『風と共に去りぬ』の主人公の名前。この作品では『風と共に去りぬ』とシューマンの「トロイメライ」が大事な役割を果たしている。

同誌掲載の、滝沢玲子「フイリピンですから」は、家族とはなにかという問いを、フイリピン人と日本人の状況を重ねて描いた八四枚程度の作品。

視点人物の名前は「エストラン」。彼は、マニラの日系企業に勤務している辰巳の専属ドライバーを務めている。会社関係だけではなく、辰巳の子どもたちの学校への送迎、辰巳の妻・洋子を買ひ物に連れてゆくことも彼の仕事である。日本語がある程度聞き取れるのだが、辰巳一家にそのことは隠している。エストランは車での会話から、辰巳家が高齢者問題で悩んでいることを知る。

一方、エストランのいちばん下の妹・リーナは日本に「看護師候補者」として滞在しているのだが、彼女と連絡が取れなくなると母親がうるたえている。つまり、エストランの視点で、辰巳とエストランの二つの家族模様がなぞられてゆくのである。

最後、認知症の兆しもあった辰巳の父とエストランが日本語でコミュニケーションして

ゆく。いちばんこの二人が分り合えている  
感覚が興味深い。ただし、リーナがどうい  
う状況に置かれているかは作品のなかで不明の  
ままである。

『バベル』第七号も充実している。

同誌掲載の、真銅孝「タクシーと菅原のた  
めのバガテル」は、タクシードライバーの憂  
鬱を描いた三〇枚あまりの短篇。

主人公の菅原はタクシー会社に勤務してい  
たが、半年前に独立した。その際、妻・セキ  
子の弟から借金をした。そのせいで、警備員  
をしているその弟（「デイディ」と通称されて  
いる）と警備員仲間の三善にたえず絡まれる  
ような状態。立ち呑み屋に呼び出されて奢ら  
されたり、二人にタクシーをただ乗りされ  
りするのである。

その鬱屈を晴らすように、菅原はガスガン、  
M61エスコートを所持している。終わりのほ  
う、立ち呑み屋でデイディと三善に菅原がガ  
スガンを放つところが痛快。タイトルの「バ  
ガテル」は作中でセキ子が弾くピアノ曲と重  
なっているのだが、この作品それ自体がバガ  
テルで、優れた短編映画を観ているようだ。

同誌掲載の、塩見千幸「あの、夏のできこ  
と」は、小学生の娘の、不思議に心が揺れた  
ひと夏の体験を、一〇〇枚近くで描いている。  
「みーこ」（美恵子）は小学校四年で、小学  
校一年の弟「ヨシオ」がいる。時代は一九七

〇年の大阪万博の開催中で、その夏、父親が  
家に不在のことが多くなる。母によるとどう  
やら父には外に「女の人」がいるらしい。

学校の帰り、みーこは見知らぬおばさんか  
ら声をかけられる。父が世話をしている「女  
の人」だった。憎らしい相手なのにみーこは  
思わず「おばちゃんの家に行ってみよう」と  
口にしてしまう。それから、洋裁をしている  
その女性の家に何度か行くことになる。しか  
し、弟のヨシオとその女性が立ち話をしてい  
る場面に出会って、みーこはつないでいる二  
人の手をはたいて、ヨシオの手を引っ張って  
走りだす……。

おそらくそのみーこの剣幕に相手の女性は  
身を引く決意をし、みーこらは父を取り戻す  
ことができたのだが、自分の家とは別の世界  
母とは別の大人の女性への憧れのようなもの  
がみーこのなかにはあったのだろう。

『黄色い潜水艦』第77号掲載の、藤本あず  
さ「希望、あるいはまだここにはないよいこ  
とについて」は、動物園で飼育の仕事をして  
いる「わたし」を軸に、奥深い世界を描いた  
一〇五枚ほどの作品。

ある日、職場の主任が「わたし」にASD  
（自閉スペクトラム症）の障がいを持つ二二  
歳の女性が新たに職場に雇われたと告げる。  
その女性・来栖のぞみには不思議な能力がそ  
なわっていた。「わたし」は雌サルのミコに特

別の愛着を持っているのだが、そのミコが抱  
いている赤ちゃんがすでに死んでいる、とい  
うのである。死んだ赤子から引き離されて悲  
しみにくれるミコに、のぞみは、自分が大切  
にしていた大きなぬいぐるみを与える。する  
とミコが少しずつ回復してゆく。また「わた  
し」は一九歳のとき一七歳の妹が自死したと  
いう辛い記憶を背負っているのだが、その悲  
しみの塊のようなものを、のぞみは感覚的に  
捉えているようなのだ。

一方、「わたし」の家では、母親が娘（「わ  
たし」の妹）の死から立ち直れず、その遺骨  
も墓に納めずに祭壇においたままである。家  
にはさらに「大ママ」と呼ばれている祖母が  
いて、その祖母がステージ4のリンパ腫に罹  
っていることが判明するが、大ママは延命治  
療を拒否する。「わたし」はその大ママにの  
ぞみのこと、妹のことなどをいちばん親しく  
打ち明ける……。

自死した妹が小さな紙に残していた「希望  
はわたしたちを欺くことはありません」とい  
う言葉、そして、「希望って何だと思っ？」と  
いう「私」にのぞみが答える「まだここには  
ないよいもんです」という言葉が深く響く。

それにしても、のぞみの不思議な能力、妹の  
死の理由などをめぐって、もつともつと作品  
が展開してほしいと願わずにいられなかった。  
『せる』第127号掲載の、西村郁子「セブン

シスターズ」は、若い女性が離島の伝統的な文化に次第に馴染んでゆく姿を、一二三枚あまりで描いている。

主人公の七瑠美(なるみ)はフリーランスのカメラマン。よくパソコンの仕事をしているカフェで、同年齢ぐらいの若い男・西森圭介から、西森の故郷である離島の、切り立った白い断崖について教えられる。三カ月後、その離島を訪れると、思わぬことに西森が迎えてくれる。西森は拠点である離島において自分の事業を展開しているのだった。その島には民宿もなく、七瑠美は西森の自宅の離れに宿泊させてもらう。

翌朝早く、七瑠美がひとりで島を歩き、カメラをまわしていると、不意に島の年寄りたちが彼女を取り囲む。彼女は肩を打たれ、正坐のうえ合掌させられる。年寄りたちはすりこぎ棒と火のついた巻き木をかざして、呪文のような言葉を唱える。彼女はどうかやらの禁足地に足を踏み入れてしまったのだった。それでも島民会議によって撮影を許可された七瑠美は、島の伝統文化に違和感を持ちつつも撮影を続け、西森と暮らすなかで西森の子どもを宿し、出産するまでに至る…。

タイトルにある「セブンシスターズ」は実際にイギリスにある海辺の白い断崖の名称だが、西森たちの島の断崖も「七つ子の姉妹」と呼ばれているのだった。おそらく最初にイ

ギリスの「セブンシスターズ」のイメージがあつて、それが作者の想像力をつうじて架空の島に移されたのだと思うが、それによって作者のなかにあるコミュニケーション志向が結実した一篇となつている。

『革』第41号掲載の、清原ふみ子「神前橋わたつて」も、一五〇枚を超える作品で、被差別部落で生まれた「私」の三歳から一九歳までの成長を描いている。

一九五四年に生まれた「私」は三歳のときにはまだ赤ん坊の妹の浪子を見守っているのが仕事だった。そのころ、父母は、母方の祖父の映画館の仕事を手伝っていた。やがてテレビが普及することで、映画館は閉鎖される以降、両親はサンダルの製造業を始める。あるとき「私」は父が馬に乗れることを知る。父はかつて馬で荷物を運ぶ仕事をしていたのだ。しかし、トラックが主流となってその馬力の仕事もできなくなったのだった。

「私」は中学生になって自分が被差別部落の人間であることを知って衝撃を受ける。それでも中学三年で「解放への道」という作文を書いてみんなの前で発表し、父を驚かせる高校生になると狭山事件の裁判闘争に出かけるようになるのだが、それで学校を休んでも「公欠扱い」になることになって疑問を抱き、「私」は学校を休みがちになってゆく。ひとりの人間の成長過程を軸としながら、

時代の交遷のなかの被差別部落の姿が丁寧に描かれていて、好感の持てる作品だ。

『架橋』第35号掲載の、磯貝治良「来るひとは、亡くなった妻との対話を手がかりにした自伝的な六〇枚弱の作品」。

「ぼく」は毎朝、妻の遺影に手を合わせる。すると、妻だった「ねんこさん」の声が頭のなかで聞こえてくる。そこに登場する名前から「ぼく」は自分の人生と関わったひとびとの記憶をつぎつぎと甦らせてゆく。

しかし、不思議なことに、ねんこさんは自分のことや「ぼく」とのことは語らない。「ぼく」には「不貞」を仕出かしていた時期があつて、それはねんこさんにも知られていて、そのことについて二人できちんと話さないままだった。ねんこさんが癌で余命数ヶ月の宣告を受けてからも、看病に奔走したのは自分ではなく息子だったのだ…。

夫婦のあいだの、最後まで晴れない闇が描かれていて、印象深い。

同誌掲載の、黄英治(ファンヨンチ)「七月八日。猛暑日」は、元首相暗殺という事件に接した際の際の、在日朝鮮人の不安をありありと描いた九〇枚あまりの作品。

還暦を過ぎた夫婦・蔡龍俊(チュヨンジュ)と美雪(ミソル)は、マンションで暑い夏を過ごしている。二人の息子はすでに自立していて、夫婦だけの生活を送っている。買い物

に出かけたおり、二人は知り合いの張香淑(チャンヒャンスギ)の税理士事務所を通りかかる。香淑も事務所から出てきて、暑気払いに夕方、龍俊宅で集ることになる。

龍俊と美雪が昼ご飯に素麺を食べはじめたとき、夫婦の息子からスマホに電話が入り、元首相が暗殺されたことを知らされる。二人は慌ててテレビを付け、それが事実であることを確認する。そして、暗殺者が朝鮮人かもしれないと恐れる。早々と張香淑も龍俊宅に顔を出し、ネットに「在日犯行説」が洪水のように溢れていることを知らせる…。

元首相暗殺のニュースを知ったとき、私は在日の人々がそういう不安と恐怖を覚えていることに正直、想像力が働いていなかった。また、捏造された「在日犯行説」が当時ネットに夥しく流れていたことも知らなかった。これは、在日の人々が日々置かれている状況を改めて伝える、貴重な作品である。

『別冊關學文藝』第69号掲載の、浅田厚美「春のドラゴン」は、老人ホームに入居している父との交流を描いた、四五枚弱の作品。

「わたし」は、電動自転車、自宅から一時間かけて、空き家になっている実家とその畑の世話に、月に一、二度訪れている。「わたし」が生まれ育った家は鉄工所だった。父のタツジは母と一緒に油塗れになって「小型特殊ナット」を作っていたのだ。いまはその工

場も「わたし」が育った家もないのだが、自転車で懐かしい道を進んでいると、土地の記憶のように思い出が浮かんでくる。セールの男がやって来るとことん値切っていた父、背中に龍の入れ墨をすることも考えたことのある父(これがタイトルと繋がっている)、豪胆でありながら不眠に悩まされていた父。

老人施設でタツジはまわりに溶け込もうとしない。頑ななままでひとりを貫いている。なにを支えに生きているのか「わたし」には分からない。しかし、ナットを作っていた時代の記憶だけは鮮明なのだ。

作品の最後、「わたし」と二人だけの花見のとき、ポルトとナットの形をしたチョコレートとタツジが食べるころなど、とても味わい深いものがあった。

同誌掲載の、河内隆雨「妻の茶碗」は、認知症のはじまっている老人のなかの妻への思いを、三五枚の作品で描いている。

「私」は六〇歳で定年退職して半年、一軒家が気ままなひと暮らしをしている。隣家は空き家になっているが、その玄関前に老人が佇んでいるのに出会う。自分の家なのに鍵がないので入れないとその老人は言う。入居先の老人ホームを抜け出してきたようだ。

「私」は自宅の二階からその老人・吉野の家庭を覗かせた。吉野と「私」の淡い交流がはじまる。

間もなくその吉野の家が解体されることが判明する。その解体に向けて土地の境界を確認するため「私」は立ち合いをもとめられる。その立ち合いの日、「私」は吉野とともに吉野の自宅に入る。吉野は懐かしげに亡くなった妻の茶碗を取り出し、紫陽花を妻がとても好きだったと語る。吉野の家が取り壊される前日、「私」は吉野の妻の茶碗、湯飲みと箸などを台所から取り出し、室内の写真撮影者など、さらに取り壊しの当日、解体業者の好意で、庭の紫陽花を株ごと掘り出してもらう。そして、それらを吉野にプレゼントする…。

別の雑誌ではまったく異なった作品世界を展開する作者だが、こういう一種古風な作品も捨てがたいと思う。

『ココドコ』第5号掲載の、若松亨尚「広島観光」は、被爆地としての広島を描いた四五枚あまりの作品。その点で、今回最初に紹介した「あべの文学」の浅井歌音「スカレットのごとく」と同様ののだが、浅井作品が祖母の姉の手記を高校生が読むという設定だったのに対して、こちらは広島をどう描くかに対する現代文学による果敢な挑戦である。

冒頭から、「猷崎綺羅美」なる「エロ爆弾」と呼ばれる女性が登場し、それから逃れるように「おれ」は広島に出かける。「墓」という名前の先輩詩人に誘われたのだ。そこで「おれ」はAIに作成してもらった反戦詩を朗読

したりする。先輩詩人と別れた「おれ」は時  
間をもてあましてデリヘルに電話する。やっ  
て来たのは、東雲久留米と名乗る小柄な女子  
大生だった。被爆三世で、教育大に通って  
いて、将来は小学校の先生になるとい  
う。後半、「おれ」が入っている広島焼の店に、ライ  
フル銃と日本刀をもった二人組の強盗が押し入  
り、店長を刺し殺し、東雲久留米の頭がライ  
フル銃で吹き飛ばされる…。

こういう目まぐるしい展開に、たえず作者  
自身によるツツコミが入る。作品は荒唐無稽  
だが、私たちが生きている現実を圧縮すれば  
こうではないか、という作者の声が作品の背  
後から聞こえてくる。

同誌掲載の、筒井透子「あたらしいた」  
は、同じ作者による「空へ」を裏側から書き  
直した七〇枚あまりの作品。

以前の作品「空へ」では、娘を亡くした音  
楽家の中崎が「セナ」というボーカロイドを  
使って「空へ」という楽曲を作り上げた。そ  
して、その「セナ」の作り手だった高橋一真  
が妻の瀬名とともに開いている田舎のカフェ  
を訪れる、という流れだった。それに対し  
今回の作品では、「セナ」というボーカロイド  
を作成するに至った、高橋と瀬名の関係が、  
「僕」という高橋の視点で綴られている。こ  
れはやはり力業と呼ぶべきだろう。二作をカ  
ップリングしてあらためて読めばどんな印象

になるのか、楽しみだ。

同誌掲載の、青木和「夜隠れ月（前編）」で  
は、物語がいよいよ佳境に差し掛かっている。  
影人のテロとその父親役の塩探りは、アジ  
ルといういささか怪しげな「お宝掘り」に導  
かれて、かつて栄えていた大都市の廃墟らし  
きものに辿り着く。しかし、不意に飛んでき  
た弓矢にアジルは背中を射抜かれ、テロは大  
きな穴に落下してゆく。

気が付くとテロは牢獄のようなところに捕  
えられている。スルストという名の青年がテ  
ロの世話をしてくれる。スルストらはテロを  
仲間に引き入れたいようだ。スルストらは  
「国」と戦っているという。テロはまったく  
新しい世界をそこに感じる。

一方、塩探りは背中に傷を負ったアジルと  
ともに宿へ引き返す。しかし、宿は焼失して  
黒焦げの廢墟になっていた。かろうじて、ア  
ジルの「相棒」であるセクタだけが井戸のな  
かで生き延びていた。アカザはどうなったの  
か、マグタはどうなったのか…。

作者は雑誌の「あとがき」で、「夜隠れ月（中  
編）」「同（後編）」と続いて、連載自体が完  
結すると記しているが、ほんとうにそんなふ  
うに終われるのだろうか。

『VIKING』第85号掲載の、長谷川和  
正「貌のない街」は、鉄工所で働く若者の  
姿を、一八歳から一九歳にかけて、一三〇枚

あまりで描いている。

じつはこの作品、今回読んだなかでいちば  
んに推したいぐらいなのだが、すでに紙数が  
尽きかけていて詳しい紹介ができない。一九  
七〇年の大阪万博の時期の、過酷な職場での  
個性の強い若者たちの物語がテンポよく綴ら  
れている。是非熟読していただきたい。

『AMAZON』第27号掲載の、安藤瑛「老  
人と鞆」は、五〇枚弱の寓意的な作品。

二度目の定年退職を迎えたとき、「わたし」  
は駅の近くで見知らぬ老人から鞆を託され、  
一緒に駅に向かう途中、その老人とはぐれて  
しまう。その鞆には不思議なことに、「わたし」  
のパスポートと名刺が入っている。それ以降、  
あの老人を探して「わたし」は駅に出かけ続  
ける…。

生きるとはどういうことか、老いるとはど  
ういうことか、そういう問いをパズルのよう  
に投げかける作品だ。

『飢餓祭』第52号掲載の、石塚明子「夕立  
受山（ゆうだちうけやま）」は、この間作者が  
綴ってきた連作の最終章にあたる作品。

若い教員同士として出会って結婚した誠二  
と静江が、ここでは老境を迎えている。誠二  
は硬膜下出血と脳梗塞と二度の病気で入院し、  
さらに二人を阪神・淡路大震災が襲う。困難  
な時代を誠実に生きてきた二人の姿を描いて  
きた作者に、エールを送りたい。